

飯能西中だより



天覧山

3月号

飯能市立飯能西中学校
学校だより
令和4年度 第12-1号
令和5年3月1日発行

<校訓> 誠・和・進

<学校教育目標>

自立 共生

<目指す学校像> 心のよりどころとなる世界に誇れる学校

一人ひとりが大切にされていることが実感でき家に帰った時に元気よくただいまと言える学校でありたい
飯能西中学校スクールアイデンティティー

故郷という言葉から思い出すこと

校長 中村 公一

日ごとに寒さが緩み、春の訪が感じられるようになってきました。春は別れと出会いの季節。3年生のみなさんとはあと2週間ほどでお別れの日を迎えます。そして義務教育課程を終えたみなさんはそれぞれの道を歩み始め、やがて故郷であるこの飯能から旅立つ日がやって来るかもしれません。さて、今これをお読みの皆さんには「故郷」（ふるさと・こきょう）という言葉から何を連想するでしょうか。

先日、「少年の日の思い出」（ヘルマン・ヘッセ）を扱っている1年生の国語の授業を観ていて、遠い昔、私が中学生だったときのことを思い出しました。そういえば私が初めて「風車小屋だより」（アルフォンス・ドーデ）や「車輪の下で」（ヘルマン・ヘッセ）という、読書の基本とでもいうような本を読んだのも中学1年生のことでした。ところで、この「少年の日の思い出」という作品はもう70年以上ものあいだ教科書に取り上げられている作品なので、保護者のみなさんの中にも覚えていらっしゃる方が多いのではないでしょうか。このように国語の教科書で扱われた作品の中には私たちの記憶に残り続け、それぞれの生き方に少なからず影響を与えているものがあります。中学生のころ国語の教科書に載っていて未だに私の心に残っている作品を挙げるとすれば、「少年の日の思い出」の他に、「かりんとう」（山本有三）、そして「故郷」（魯迅）があります。今にして思うと私の中でこれらの作品に共通していたのは、人間には身分や経済の格差という生まれながらにして抗えない宿命のようなものがあることを感じずにはいられなかったということです。このことが直接影響していたかどうかはわかりませんが、やがて高校生になり社会のことや自分の置かれている状況が理解できるようになった私は、チャンスがあるのならもっと勉強して親には果たせなかつた生き方をしてみたいと思うようになったのです。

以前にもお話ししましたが私の故郷は長野です。高校を卒業すると同時に東京の杉並で一人暮らしを始めたのですが、東京での一人暮らしと言っても決して華やかなものではありませんでした。4畳半一間でお風呂は無くトイレは共同。私の実家からの仕送りではそれでも借りるのがやっとでした。私が両親に上京したいと思っていることを伝えたのはその前の年のことでした。「仕送りがなくなったときは新聞配達でも何でも、アルバイトをしながらなんとか頑張るから。それでもだめだったときは諦めるから出来るところまで何とかやらせて欲しい。」と、両親の前に正座し、手をついて頭を下げ、必死にお願いしたのです。その後しばらくの沈黙がありました。私は畳に手をついたまま、両親から何と言われるかじっと待っていたのですがその時間がとても長く感じられました。しばらく経つてから両親が交わした言葉は「お母さん、お金はなんとかなるか?」「なんとかするしかないね。」でした。父も母も幼少期に終戦を迎えたのですが、経済的に苦しい家庭に育ったため新制中学を卒業した後に高校へは進学することができませんでした。その後迎えた高度経済成長期。多くの人が高校に進学するようになる中で、夜学に通おうと考えてはみたものの、仕事がきつく就業時間が長い上に、田舎への仕送りもしなければならずそんな余裕はとてもなかつたようです。家計を支えるために中卒で就職した二人はそれぞれ数え切れないくらいの苦労をしたはずですが、当時はそんなことが当たり前の時代だったのです。きっとみなさんの中にもそういった大変な思いをされた方が大勢いらっしゃることでしょう。そんな思いもあってのことか私の将来を案じてくれた二人の言葉に、私の目からは自然と涙がこぼれていきました。

その後、母は農協から当座に必要なお金を借りてくれましたが、月々の返済もあるので生活費を切り詰めなければならず、一日のお昼代は100円だけという日が続きました。仲間からお昼を食べに行こうと誘われてもお金がないので行けません。水だけ飲んで図書館などで昼休みを過ごしたり、売店で安

いパンを一つ買って外のベンチで食べたりしました。お風呂や洗濯にもお金がかかるので毎日は行けません。その月の残金を考えながら一週間に数回でした。当然のことながら友達と映画を見に行ったりとか食事をしたりすることもできませんでしたが、そんな生活でも他の人を羨んだり逃げ出したりすることがなかったのは、他にもっと大変な境遇の人がいたということもあるのですが、故郷で元気に頑張ってくれている父母の存在が大きかったからだと思います。

高校を卒業してまもなく、東京での生活を立ち上げるために布団や衣類、本などを車に載せて長野から運んでもらったときのことです。東京でも珍しく小雪がちらつく寒い日でした。荷物を置いて帰る車の中からそっと私の手を握りしめ「辛いこともあるだろうが頑張れ。私もがんばるから」と言ってくれたのです。父はハンドルを握りしめてじっと前を向いたままでしたが、二人の目にはうっすらと涙がうかんでいるのがわかりました。「いつか両親を喜ばせてあげたい。必ず安心させてあげたい。」それまでには何としても頑張らなければいけないとそのとき思ったのです。故郷という言葉から思い出されることは人それぞれにいろいろあるのでしょうか、私にとっては親の有り難みが想起される言葉なのです。

右に紹介したのは詩や絵などの作家である須永博士さんが書いたものです。須永さんは若い頃、生きる希望を見いだせずに孤独を感じていた日々があったそうなのですが、やがて糸余曲折を経て日本一の詩人や絵描きになろうと心に決めるに至った自身の経験をもとに、今ではすべての人に勇気や優しさを伝えようと作品を作り続けていらっしゃいます。中でもこの作品は結婚式などの新郎新婦から両親に向けた贈り物としても有名です。きっと簡単な言葉の中に感謝の気持ちが詰まっているからなのでしょう。

校長講話から

先月の校長講話では右にあるようなインド数字とアラビア数字についてお話ししました。私たちが普段計算するときに使っているのはアラビア数字と呼ばれるものですが、アラブの国でこの数字は使われていません。アラブの国で使われている数字はインド数字（ヒンディーナンバー）といって、右の欄の上段に並んでいるものなのです。下段に並んでいるアラビア数字（アラビックナンバー）と比べてみるとその違いがよくわかります。

ここで1から5までのインド数字をよく見てください。1から5までは画数で数を表しているのに気がついたでしょうか。ではアラビア数字の場合はどうなのでしょう。実はアラビア数字の成り立ちは角の数で数を表したことから始まったのだそうです。このことは私がバハレーン日本人学校に勤務していたときに、私のアラビア語の先生でもあったバハレーン教育省の職員の方から教えてもらいました。アラビア数字の成り立ちについては諸説あるのですが、彼は佐賀大学の理工学部の大学院にも留学していたくらいなのでそれなりの根拠を持って説明してくれました。講話では実際に1から5までの数字の中に角がどのように隠れているかを示してみましたが、6から9までについては生徒のみなさん自身で考えてみるようにお願いをしました。どうですか？答えはみつかったでしょうか。早速みんなで答えを出し合ってみたり、ネットで調べてみたクラスがあるようですし、校長室に答えを聞きに来てくれた生徒もありました。疑問に思ったことやわからないことをそのままにせず手を尽くすこと。これは学びに向かう原点でもあります。その姿勢を大切にしてほしいと思います。

○ 3月の主な行事予定 ○

父ありて
我が強さあり
母ありて
我が優しさあり
父母の姿
いつも忘れられず
いつも我が人生の
心のささえなり

須永博士

1 2 3 4 0 6 7 8 9 •

Hindi numerals

1 2 3 4 5 6 7 8 9 0

Arabic numerals

どちらも最初は角の数辺の数を表したものでした



質問に来てくれた1年生のみなさんです。ほかのことでもまた聞きに来てくださいね。

2日（木）3年生を送る会
3日（金）公立高等学校合格発表
13日（月）卒業式予行
14日（火）卒業式準備
15日（水）第51回卒業式
1・2年生は臨時休業

17日（金）保護者会
19日（日）吹奏楽部定期演奏会
20日（月）4時間授業
22日（水）4時間授業 大掃除
23日（木）3時間授業 給食なし
24日（金）修了式